

国

際交流基金（ジャパンプアウンダーション）が推し進めている海外における現代日本文化紹介事業の一環として、この九月に、現代日本SF小説のアンソロジー『ゴルディアスの結び目』がロシア語訳で出版された。出版社は外国文学の出版で定評のあるモスクワの「イノストラシカ社」。編者は、気鋭のアメリカ文学者でSF批評の第一人者でもある異孝之氏（慶應義塾大学教授）で、同書には異氏の選んだ12編の短編小説が収められている。翻訳はロシアの優秀な日本研究者たちが手分けして行ない、さらにロシア語に通じた日本人によるチェックを通して万全を期している。表紙のデザインは、いまロシアで一番活躍しているブック・デザイナーの一人、アンドレイ・ボンダレンコ氏。なんとも贅沢な本作りだ。

この本は、全4冊で構想された現代日本文学ロシア語訳シリーズの1冊である。ロシアの文

学者グリゴリー・チハルチシヴィリ氏と私が相談しながら、シリーズ全体の方向性を考えてきた。チハルチシヴィリ氏は三島由紀夫をロシアで初めて翻訳・紹介したことで知られる日本文学者だが、同時にペンネームをボリス・アクーニンという、いまロシアでたいへんなブームを巻き起こしている人気推理小説家でもある。

シリーズの計画が始まったのは3年ほど前のこと。「日露作家会議」をジャパンファウンデーションの助成を受けて東京で開催したとき、人気作家アクーニンとして来日したチハルチシヴィリ氏と、この件について相談した。すでに彼と組んでロシア語版の現代日本小説アンソロジー『彼』『彼女』の全2冊…それぞれに12人ずつ現代作家を収録を編集しており、それがなかなか好評だったため、さらに発展させられないかという話の流れだった。

しかし、現代日本文学の何を

紹介すべきか、と

いうのは難しい問題だ。もともとロシアでは日本の古典の研究や翻訳はかなり盛んだったが、現代文学となると白紙に近い状態だった。2000年代に入ると村上春樹ブームがロシアでも始まり、現代日本に対する関心は高まっていたのだが、その一方で、大部分のロシア人読者にとつて日本はあいかわらず非現実的な異国情緒の領域にとどまり、現実の姿がなかなか見えてこない、というもどかしさがあった。そこで、ロシアにおけるこれまでの翻訳・紹介から欠落している、現代日本文学の驚くべき広がりや認識してもらうためにこれから必要なものは何か、と考

古い日本の新しい発見

ロシアで出版される
SFと時代小説のアンソロジー

ぬまのみつよし
沼野充義

東京大学大学院人文社会系研究科教授

えていった結果、四つのジャンルでアンソロジーを作るのはいのではないか、という結論になった。オリジナルのアンソロジー作りは、手間ひまがかかってなかなか商業ベースに乗りにくいのが、きちんと作れば現代日本文学を知るための基本図書と



ロシアで刊行された現代日本文学アンソロジー
（左）現代日本小説集『カタストロフの理論』
（右）現代日本詩歌集『ふしぎなかげが』

して広く読まれ、読者に強いインパクトを与えるはずなので、ジャパンファウンデーションの企画にふさわしいというのが私たちの考えだった（4冊のアンソロジーについては別表参照）。

いずれもはつきりとした編集コンセプトに基づいた、これまでにロシアにまつたくないタイプのアンソロジーであり、すべての巻に編者による序文がそえられ、予備知識を持たないロシアの読者にもそれぞれのジャンルの歴史と現状がわかるようになってる。

ジャンルの観点からして特にロシア人にとって興味深いのは、やはり今秋刊行の2冊ではないかと思う。まずSF小説についてだが、ロシアでは旧ソ連時代から独自のSFの伝統を持っていて、ファンもかなり多い。これまで、戦後の日本SFからは小松左京、星新一、安部公房などの作品がロシア語に訳されてきたが、最近新しい翻訳がほとんど出ておらず、また今回の異氏によるアンソロジーのよ

うな、歴史的発

展に即して戦後SFを見渡すような

本はまったくな

った。おそらくこの

本は、ロシアのSF

ファンの長年の飢えを

癒すものとして熱い注

目を浴びるだけでなく、

戦後日本の精神史の一面

を鮮やかに伝

えるものと

して広く読者

に受け止めら

れるのではない

かと思う。

時代小説に関

していえば、これ

は歴史的・風俗的

なディテールがあま

りに日本的で、外国

人にはなかなか簡単に

は理解できない。この

ような本を出版するこ

とは、ある意味では相当

な「冒険」だが、忍者の

登場する日本を舞台とした推理

小説を書いているチハルチンヴ



〈左〉現代日本SF集『ゴルディアスの結び目』

〈右〉現代日本時代小説『暗殺剣虎ノ眼』

ロシアで紹介する4冊のアンソロジー

現代日本詩歌集『ふしぎなかせが』

(高橋順子編、2003年刊)

現代詩・短歌・俳句の3ジャンル、71名を収録。3ジャンルを一望できるアンソロジーは、ロシアでは初めてであり、現代短歌・俳句のまとまった紹介もこれが初めて。

現代日本小説集『カタストロフの理論』

(沼野充義編、2003年刊)

島田雅彦、山田詠美、奥泉光、川上弘美、江國香織など9作家の1990年代以降の中・短編を取める。「村上春樹だけじゃない」現代日本小説の豊かな広がりを示す。

現代日本SF集『ゴルディアスの結び目』

(異孝之編、2004年9月刊)

小松左京、筒井康隆の「第一世代」から、菅浩江、牧野修の「第四世代」に至る12人の作家を選び、戦後SFの展開を追った。

現代日本時代小説集『暗殺剣虎ノ眼』

(縄田一男編、2004年11月刊予定)

山本周五郎、池波正太郎、山田風太郎、藤沢周平から宮部みゆきまで12作家を取める。ロシアではまったく未紹介だったジャンルの翻訳、挿絵・中一弥、

イリ氏が、こういうジャンルこそロシア人にとっておもしろいはずだと主張して、シリーズに入ることになった。編者は時代小説研究・評論の第一人者、縄田一男氏。翻訳は確かに難しくかったが、古典を専門とする2人の優れた日本文学者の手になる訳稿がすでに完成している。さらに、時代小説の挿絵を描かせたらこの人をおいてほかにいないといわれる中一弥画伯の挿絵がページを飾ることになった。この本はおそらく「古い日本の新しい発見」として、ロシア人の読者を大いに喜ばせることだろう。



ぬまのみつよし ● 東京大学大学院人文社会系研究科教授 / 1974年東京都生まれ。東京大学教養学部卒、ハーバード大学大学院スラブ語文科学科留学。ロシア、ポーランドの現代作家の研究・紹介に努める。主な著書に『屋根の上のバイリンガル』『ユートピア文学論』など